『比叡』読解のこころみ（二）

井上三朗

目次

一　はじめに
二　人間的な愛への執着とそれとの訣別
三　藤木俊子から俊瑛へ
（1）出家を決意した俊子と、出家のその他の理由
（2）得度式以後
（3）比叡での寵山
四　愛と宗教とのかかわり
（1）南条真潤の場合
（2）俊瑛における肉体への意識
（3）俊瑛と〈男〉との関係
五　おわりに

（太字は今回掲載分）[1]

四　愛と宗教とのかかわり

（2）俊瑛における肉体への意識

藤木俊子は俊瑛となることによって、人間的な愛と訣別する。では、俊瑛において、肉体への意識は完全に消滅するのであろうか。〈男〉との関係をしらべる前に、今度はこのことを明らかにしておきたい。

藤木俊子は俊瑛になる直前、中尊寺での得度式の日の早朝、「心身を潔める」（一〇四頁）ために、風呂に入る。このとき、俊子は、「湯の中に浮んだ、（…）まるく豊か」な乳房を注視し、脚や腕が、「白く蒼く、清潔に見え」ることをたしかめ、「自分の肉体が醜く老い崩れる前に、出離するということに」、「ひそかな満足を覚えてい」る（一〇四頁）。いったい、俊子は何に満足しているのか。もちろん、「出離するということ」にである。と同時に、自分の肉体が「醜く老い崩れ」てはいず、一定の美しさを保っているという点にたいしてである。俊子は入浴する前、「脱衣場の鏡で、最後の自分の裸

身にも別れ」を「しっかりとつげて」いる（一〇四頁）。出離とは、肉なるものへの執着を断つということなのだから、自分の肉体と訣別することでもある。けれども俊子はこの訣別に際して、自分の裸身が「若さを残している」ことを「有難」く思っている（一〇四頁）。得度式の間際の俊子は、「若さ」の「残」る自己の裸身に敏感になっている。自らの肉体を強く意識している。ここから、得度ののちも、俊瑛から、肉体への意識、女性性がなくならないであろうことが予想される。

作品第一章で、俊瑛は髪を失って半年ほどたった頃、外国のファッション雑誌に、「その頭が、くっきりと青坊主に剃られていた」（二一頁）白人女性のイブニング姿の写真が載っていたことを思い起こしている。その「白人のモデル女の坊主頭と首と肩の線は、息のつまるほどのエロティシズムをたたえてい」（二一一頁）ると、俊瑛には感じられる。いったいなぜ俊瑛は、この坊主頭の白人のモデル女に興味をそそられるのか。彼女もまた、出家得度したことで坊主頭になったからだ。俊瑛は白人のモデル女と自分とを重ねあわせながら、自分もまた、「エロティシズム」を「たたえ」る可能性があるかどうか、無意識のうちに探測しているのであろう。少なくとも、坊主頭の白人のモデル女のエロティシズムを自己の問題としてうけとめていることはたしかである。俊瑛における肉体への意識を認知することができる。

得度してから二年後の俊瑛は、タクシーで烏丸通を走っていると、前方の中型トラックに、「肉色の素裸」（二一頁）のマネキン人形が積まれているのを目撃する。俊瑛の視点から、「脚も手もデフォルメされて、ほっそりと美しい上、乳房は十六、七の娘のように初々しく、ふっくらと盛りあがっている。腹から腰の線はなめらかに伸び、脚のつけ根の三角形のふくらみをつくる溝もやわらかな翳をためている」（二二頁）との描写がなされている。俊瑛はマネキン人形にエロティシズムを見いだす。タクシーの運転手は、「マネキン人形いうやつは、ほんまの女よりみな、ずうっと女らしいからだの線してまっせ」（二二頁）と口にする。運転手は俊瑛じしんの気持ちを代弁している。しかも注目すべきことに、マネキン人形の頭には「そろって毛髪がない」（二二頁）。マネキン人形たちは、「坊主頭」（二二頁）であるという点で、俊瑛と共通する。俊瑛はマネキン人形のエロティシズムを、自分のそれと対比しつつ考量している。マネキン人形を目にすることをとおして、俊瑛は自らの肉体をも意識している。

マネキン人形の思い出を脳裡に浮かべた俊瑛は、掌を懐にいれ、乳房にふれたことがきっかけとなって、自分の乳房に思いをめぐらせる。俊瑛は、出家する以前に和服を着ていた頃、「乳房がゆたかすぎ」るため、「ブラジャーがはなせなかった」のに、僧服を身につけるようになってから、要らなくなった理由を思索する（二四頁）。「白衣の上に重ねる黒の道服がゆるやかな仕立で、胸の高さを一向に目立たせないから不必要になったのか」、それとも、「二年の禁欲

の歳月が、乳房を人しれず痩せさせていたためか」と自問する（二四頁）。俊瑛は、自分の乳房が豊かでなくなったのかどうか思案している。このような思いが芽生えたのは、もちろん、掌が乳房にふれたからではある。だが「ふっくらと盛りあがっ」た乳房をしたマネキン人形たちを思い浮かべたことが、背景として関係しているかもしれない。いずれにせよ、この乳房への想念から、俊瑛が自らの肉体を意識していることがたしかめられる。

得度して二年後のことを物語った第一章において、俊瑛は、「上品な身ごしらえ」（二四頁）の七十近い老婦人と立ち話をした最近の記憶を喚起している。黄昏どき、俊瑛は手紙をポストに投函すると、老婦人から「あのう、つかぬことをお伺いしますが」（二四頁）と声をかけられる。「尼さまの御召物というのは、やっぱりあの、女仕立でございますか。それとも男仕立になっているのでございますか」（二四―二五頁）と、老婦人は問う。俊瑛は「女仕立になっています」（二五頁）と答える。「それではあの、身八つ口はふさいでないのでございますね」（二五頁）と老婦人はたたみかけて訊く。「はい。あいております」と俊瑛が返事すると、老婦人は、「さようでございましたか。やっぱりねえ……」と反応し、不躾な質問をしたことを詫び、立ち去る（二五頁）。一人になった俊瑛は、「身八つ口があいていると答えた瞬間、老女の目の中にある翳がちらと走ったことを思い浮べ」、「やっぱりねえ。といった声の調子に、詠嘆とも承認ともちがう一種の雰囲気があったこと」を確認している（二五頁）。いったいなぜ老婦人は、尼僧の服の身八つ口があいているかどうか知りたかったのだろうか。その理由は、普通の女の着物と同じようであれば、脇の下から手を入れて、素肌に容易に触れることができるからである。老婦人は、尼の道服もまた、男との情事に適しているかたしかめたかったのである。このあと、俊瑛は、かつて付き合っていた若い男が、「思わずすっと、手首が脇あきからすべりこみ、肌に指先が触れた瞬間、低いうめき声を洩らし、愕いて飛びすさった」（二六頁）こと、また別の男が、「逢うなり乱暴に抱きすくめ、いきなりそこ〔身八つ口〕から手をいれ、冷い掌に、しっかりと素肌の背をたしかめなければ落着こうとしなかった」（二六頁）ことを思い返している。老婦人との身八つ口にかんする会話を契機として、俊瑛は、男たちとの肉体的接触の情景を想起している。ということはすなわち、肉なるものへの思いにいざなわれている。

このように俊瑛は、得度後も自らの肉体を意識し、肉なるものの邪念にとらえられる。出家したからといって、地上的・肉体的な愛と訣別したからといって、生身の人間である以上、肉体への意識を消滅させることは、不可能なのである。

（3）俊瑛と〈男〉との関係

このことを踏まえたうえで、俊瑛と〈男〉との関係を検討することにしよう。〈男〉は得度の日の三日前に、俊子のマンションを訪ねる。その日、〈男〉から電話があったとき、俊子は、「男は今夜泊っ

ていくだろう。そして、それが「この世」でのふたりの最後の夜になるだろう」（三五頁）と推測している。たしかに、得度して俊瑛となった俊子は、〈男〉と肉体関係を結ばない。しかし〈男〉との関係そのものはのこるのであって、しかも、得度式から比叡への入山に至る物語の展開のなかで、それより以前の過去の、〈男〉にまつわる回想の場面が折にふれて挿入されている。俊瑛の宗教、霊的成長は、〈男〉との関係を抜きにしてはありえない。そういうわけで、以下において、俊瑛の宗教（信仰）とかかわらせながら、彼女の〈男〉との関係を分析したいと思う。

それにしても、俊瑛（俊子）と〈男〉との関係はきわめて親密である。もともと、俊子が出離への願望をはじめて洩らしたのは、〈男〉にたいしてである。〈男〉のほうは、「この世」でのさいごの夜、「送っていかなくて大丈夫か」（七一頁）と俊子に訊いている。このあと、〈男〉は「どうしても変更出来なかった。明日、沖縄に発つんだ」（七一頁）と言い訳している。〈男〉は俊子をどこへ送っていくことを考えているのか。得度式のおこなわれる平泉の中尊寺である。俊子の出家は人間的な愛に訣別を告げるものとしてあった。そういう意味をもつ出家得度に、二人で一緒に行くことを思い立つ〈男〉は、俊子によほどの親愛感をいだいていると断定できる。これにたいして、俊子は「ひとりで行けるから」（七一頁）と返答する。出家とは一人でなされるのが当然であるのに、彼女は〈男〉に見送られることをはなから拒否しているわけではない。俊子にしても、〈男〉に相当の親愛の情をいだいていることが弁別できる。

作品第四章、俊瑛は得度式を済ませたあと、幼なじみの幸江の手引きで、タクシーで幸江の別荘に向かう。ところが、〈男〉が沖縄から飛行機を乗りついで、二人より前に別荘に到着し、俊瑛を出迎える。俊瑛は先に玄関を上って、「コートをぬぎ、ショールをはぎと」（一五七頁）り、尼の姿となって〈男〉と対面する。「自分の僧形を見てほしいという外、何の雑念もない」（一五七頁）と書かれているように、尼僧となった自分の姿を〈男〉に見てもらうためだ。俊瑛は「無言で笑いかけようと」する（一五七頁）。だが「作りかけた俊瑛の微笑は、たちまち口許で硬ばり、頬が痙攣して引きつるのを感じ」る（一五七頁）。それはなぜか。言うまでもなく、得度したことによって、昨日までの愛人同士の深い関係は終わり、これからは単なる知り合いとして交際していかなければならないことを、俊瑛が思い知ったからだ。事態の急激な変化に直面して、俊瑛はほほえみすら投げかけられなくなったのである。

事態の急変を痛感するのは、〈男〉のほうも同様である。「やや見下す位置になった男の顔」が、「いきなり突き崩さればらばらになる」のを俊瑛は認める（一五七頁）。「寒さに蒼白になっていた男の顔」は、「赫く染め上げられてい」き、「子供が泣き出す直前」の、「異様に切迫したもの」になる（一五七頁）。また男の顔は、「どこか傷ついた獣めいても見え」る（一五七頁）。一言でいうなら、「毀形ということばは、こんな男の表情にこそあてはまるのではないだ

ろうか」（一五七頁）と俊瑛が自問しているごとく、〈男〉の表情は「毀形ということば」によって形容できる。「毀」とは〈こわすこと。こわれること〉である。[2] したがって、「毀形」とは、〈こわれ、ゆがんだかたち〉というほどの意味である。尼僧となった俊瑛を目の前にして、〈男〉の顔が「毀形」になるのも、これからは、今までと同じ関係をつづけることができなくなったことを、〈男〉があらためて認識したからである。〈男〉の「毀形」の顔を見て、俊瑛は、「自分が取り返しのつかないことを仕出かしてしまった」（一五七頁）との思いに見舞われる。この思いは、二人の関係を今までどおりに維持することができなくなったことを、瞬間的に悔いる感情である。俊瑛の出家得度という出来事があったとしても、彼女と〈男〉とのあいだの絆は非常に強いと判定することができる。

俊瑛を別荘に連れ帰った幸江は、不意の来客に狼狽するけれども、座敷で夕食をとったあと、〈男〉には離れに寝てもらうことに決める。こうして「俊瑛は食事をとった隣りの部屋に、幸江は奥の茶の間に、男は渡り廊下の向うの離れの茶室に、それぞれの寝床がしつらえられ」る（一六二頁）。一人になった俊瑛は、眠りにつき、夢をみる。俊子時代の自分が、「深い奈落にまっさかさまになり涯しもなく堕ちていく」夢である（一六三頁）。「長い髪が奈落から吹きあげてくる強風にあおられ焔をあげる鬣のように背になびいている」（一六三頁）。「髪の根は引きつれ」（一六三頁）て、ものすごく痛い。「堕ちる不安と痛さの中で、呻きと身悶えに」、俊瑛は目を覚ます（一六三頁）。この夢は何よりもまず、出家以前の自分にもどれば、「深い奈落」に堕ちるという警告の価値を有している。とはいえ、長い髪の自分の夢をみるとは、出離する前の自分に、ある種の郷愁をいだくことでもある。なぜ郷愁をいだくのか。〈男〉と自由な関係を結ぶことができるからだ。「闇の中に離れにつづく長い廊下が、トンネルのように浮んでくる」（一六四頁）と語られているように、覚醒した俊瑛は、「離れ」に至る、「トンネル」のような「長い廊下」に注意をうばわれる。この「離れ」には〈男〉がいる。俊瑛は、たとえ「深い奈落」に堕ちることになるとしても、「離れ」まで行って、〈男〉に会うことを望んでいると推察される。前述のように、俊瑛の内心では、出家することによって、〈男〉との関係を今までどおり継続することができなくなったことを後悔する感情が芽生えていた。夢から覚めたあとの俊瑛の心の動きは、この感情の延長上にあると判断できる。

このあと、俊瑛は〈男〉のいる離れに向かうのであるが、その前に彼女は、〈男〉としたさいごの旅をしばし顧みている。[3] ここで、〈男〉とのさいごの旅に目を向けておきたい。この旅は〈男〉の故郷への旅である。日頃、〈男〉は自分の古里の話を事細かにする。だが俊子が半信半疑で話を聞いていたため、〈男〉は「ま、行ってみるさ、嘘かほんとか。最後の旅だものね」（一七一頁）と誘う。俊子は〈男〉から「最後の旅」と言われて、「うろたえてしま」う（一七二頁）。なぜなら、「男にそういわれるまで」、俊子は「自分が

姿を替えてしまった後での男とのかかわり方について、つきつめて見定めてみたことがなかった」からだ（一七二頁）。〈男〉に指摘されてはじめて、俊子は、「法衣の」自分が「男と旅をすることがあり得ようか」（一七二頁）と気づく。俊子の出家の決意は、〈男〉との関係を深く考慮することなしになされたことがわかる。

このさいごの旅において、〈男〉の故郷の町に着いた二人は、町なかを散策する。〈男〉は町の変貌を目のあたりにして、「変ったなあ、ほんとに変ったよ」（一七五頁）と感慨にふける。二人は蕎麦屋に入る。〈男〉は店の老婆から、昔、贔屓にしていた店などがどのようになったのかを聞き出す。それから二人は、〈男〉のかよった小学校を見に行く。翌日には、〈男〉の古里が海に面した町なので、船に乗って捨島に渡る。捨島とは、「永遠に浄土に入ることを見放された罪の裔たちが棲む」（一八二頁）島である。二人は神社を見たあと、船で一緒だった警官に、風葬の跡と、三百ほどの髑髏が並べられている洞窟に案内してもらう。

この旅のなかで、二人が〈男〉の小学校を訪れ、それから海に通じる雑草のなかを歩いたため、俊子が傷ついた折の〈男〉の振る舞いは印象的である。〈男〉は、「そこ、血が出てる」（一七九頁）とささやき、傷口を指でなぞる[4]。俊子は、「首筋から片頬にかけてひりっとした痛みが走」（一七九頁）るのを覚える。〈男〉は「草で切ったんだな」と知らせ、「そのまま俊子の首をひきよせ」、「舌」で「ゆっくり傷口をなめ」る（一七九頁）。〈男〉が俊子の傷を気遣うこの場面からは、俊子にたいする、〈男〉の限りないやさしさと愛とを感知することができる。

〈男〉の故郷への旅を終えた二人は、「西の都会」（一九〇頁）にたどり着く。〈男〉が古美術の商いをしていることは先述したとおりである。「西の都会」のコレクターのひとりが死亡したため、その遺族が金銅仏を売る前に、〈男〉は値ぶみをするよう呼ばれている。二人は「西の都会」で別れ、俊子は一人、列車で帰京することになる。〈男〉は週刊誌と甘栗を買って、列車の中で出発を待つ俊子のところにひき返してくる。まもなく列車は動き出す。〈男〉は手をふりながら見送る。

俊瑛はこの場面を、「あまり屢々」、「頭の中で反芻するせい」で、「つい、この間のことなのに」、「もう何十年も前の記憶の中の一場面のような気がする」（一九一頁）。彼女は、「のびた髪を額に乱し、息を弾ませ、上気したその時の男の顔」（一九一頁）を思い浮かべる。しかし今回は、「その顔」に、「剃髪後の彼女の顔をはじめて見た時の、突き崩されたような男の顔」が「重なる」（一九一頁）。俊瑛は、「たった今、離れにひとり寝ている男の傍に駈け寄り」、「詫びたい」気持ちにかられる（一九二頁）。何を「詫び」るのか。テクストには、「ああいう表情をさせてしまったことを詫びたいと思う」（一九二頁）と書かれている。つまるところ、〈男〉をひとり残して出家したことを彼女は謝りたいのである。このあと俊瑛は「全身に熱いものが駈けめぐ」（一九二頁）るのを感じる。「熱いもの」は、「叫びだし

たいような切羽つまった激情」と換言され、さらには「湧きたつ熱情」とも言い直されている（一九二頁）。この「熱いもの」の「湯気が静まった後に」は、「冷え冷えとした真空が、体内にも自分の周囲にも生れる」（一九二頁）ことを、俊瑛は経験によって知っている。だが彼女はこの「湧きたつ熱情」に今回も「打ち勝」つことができない（一九二頁）。このあと、「道を踏み誤った時も、道を掻き開いた時も、過去の俊子を動かしてきたものは、この軀の震える得体の知れない熱情であった」（一九二頁）という一文がつづく。現在の、すなわち、得度の日の夜の俊瑛もまた、「得体の知れない熱情」に揺り動かされるのである。

この「熱情」とは何か。作中、それは「欲情ではな」いとことわられている（一九二頁）。「欲情」とはもちろん、肉体的な欲望のことである。とはいえ、「熱情」は愛の欲望と結びつく可能性を秘めたものである。というのも、「今、俊瑛をゆさぶっている熱情は、男への一途な憐憫であった」（一九二頁）と説明されているからである。つまり、「熱情」が「憐憫」であったと規定されている。「憐憫」は愛を構成する一要素であり、愛は欲望をもたらす。要するに、「憐憫」とは愛の欲望に変容しうる感情なのだ。「寝床に起き上り正坐してい」る俊瑛は、「獲物に飛びかかる瞬前の獣のように全身が緊張しきっていた」（一九二頁）と描かれている。この描写は、「俊瑛をゆさぶっている熱情」をとらえたものと認定できる。けれども、「男への一途な憐憫」の動きを描いたものとみなすことは困難である。ここにおいて、「憐憫」は愛の欲望に生成、発展している。「獲物に飛びかかる瞬前の獣のように」という直喩は、俊瑛が愛の欲望のたかまりに支配された状態を示唆している。かくして俊瑛は、幸江が眠っているのをたしかめてから、僧服を着、毛布をかぶり、部屋の外に出、＜男＞がいる離れに向かうことになる。

俊瑛が、「蒲団の上に起き上り、凝然と坐ってい」（一九三頁）る＜男＞と顔を合わせる場面で、彼女が震えているという事実は重要である。俊瑛は身にまとっていた毛布をとる。すると「歯がかちかちと鳴」る（一九四頁）。「部屋の石油ストーブは小さ」いが、「せまい四畳半には充分で、室内は暖かすぎるほど」である（一九四頁）。だが「それなのに俊瑛は尚細かく震えつづけ」る（一九四頁）。俊瑛がからだを震わせるのは、外が雪で、寒さの中を通ってきたからではある。しかし「室内は暖かすぎるほど」であるのだから、彼女の震えは単に寒さのせいだけではない。俊瑛は出家得度したとはいえ、人間的な愛のぬくもりが欠けているがゆえに、身を震わせているとも解せる。彼女は人間的な愛のぬくもりをもとめて、＜男＞の部屋を訪ねたともうけとれる。

この場面で、＜男＞が「部屋の真中に敷いてある蒲団を手早く二つに折り柏にして、部屋の片側の壁に押しやっ」（一九四頁）ている点も、注目に値する。＜男＞は出家した俊瑛と肉体的な交わりを結ぶつもりなど毛頭ない。のちに二人はこのときのことを振り返り、「あわてて蒲団たたんでたわね」（二三〇頁）との俊瑛の指摘に、

＜男＞は、「せっかく思いつめて出家したんだから、おれに出来ることは、それをきちんと全うさせてあげなければと、自分にいいきかせていたところだったから」（二三〇頁）と釈明している。＜男＞は俊瑛を心の底から愛している。それゆえ、彼女の出家を重たい事実とうけとめ、自らの肉体的欲望を断ち切ろうとするのだ。＜男＞はこのあと、文机のほうに俊瑛を招き、中央にのっている、「小さな金色の金銅仏」（一九四頁）を見せる。＜男＞は俊瑛の得度を祝うために、この「金銅仏」を持ってきた。しかしつい渡しそびれてしまったのである。＜男＞は「顔を見ず」、「腕を廻し俊瑛を抱きよせ」る（一九四頁）。この行為は欲望に揺り動かされてのものではない。欲望の仕草ではなく、やさしさ、浄化された愛をしるす仕草とみるべきである。

俊瑛は＜男＞から金銅仏をもらい、部屋を立ち去ることにする。＜男＞が明日、出発することを伝えると、俊瑛は、「来て下さっただけで嬉しかったわ、ほんとに思いがけなかったから」（一九七頁）と謝辞を述べる。＜男＞は「行きかけた俊瑛の肩を摑み」、「胸に引きよせた俊瑛の頭に、毛布の上からしばらく顎をのせてい」る（一九八頁）。＜男＞は欲望にかられて、俊瑛のからだを胸にひきよせるのだろうか。＜男＞の行動のなかに、欲望がまったく介入していないとはいえないかもしれない。しかし＜男＞の行為は、全体的に見て愛の行為であり、その愛は可能なかぎり欲望から浄化しようとしたものである。これにたいし、＜男＞の胸にひきよせられた俊瑛は、「おだやかにひっそりと瞼を閉じてい」る（一九八頁）。彼女は＜男＞に身をゆだねている。だが欲望に屈服しているわけではない。「おだやかに」という表現から探知できるように、俊瑛は、＜男＞のものであると同時に自分のものでもある、浄化された愛に身をまかせているのだ。＜男＞は「行きなさい」と命じて、「俊瑛を放し、肩をやさしく押し」ている（一九八頁）。「やさしく」という言い方から、俊瑛が＜男＞のやさしさのなかにひたっていたことがうかがえる。さいごに、廊下で「毛布の裾」を「足許にから」ませた俊瑛にたいして、＜男＞は「転ぶな」という言葉を投げかけている（一九八頁）。この言葉は文字どおりの意味のほかに、宗教的な次元での＜転ぶな＞という意味を含ませていると解釈できる。いずれにせよ、俊瑛への、＜男＞の限りない気遣いがかいま見える。

得度式の日の、幸江の別荘での俊瑛と＜男＞とのやりとりを瞥見した。俊瑛の場合、先に論考した南条真潤の場合とはちがって、宗教（信仰）と愛とは敵対していないように見える。その理由は、南条真潤における愛が欲望の愛であるのにたいして、俊瑛の場合は、彼女のなかに愛の欲望が看取できるとしても、＜男＞が彼女の出家を全うさせるために、愛を欲望から浄化しようとしているからである。＜男＞が自己の肉体的欲望を制圧し、浄化した愛を生きようとするかぎり、俊瑛において、宗教と愛とは対立しない。愛が信仰のさまたげになるといったことは、けっして起こらないのである。

出家得度した俊瑛は、東京のマンションをひき払い、杉野老人の

世話で、京都の「西北の端」（二〇〇頁）にある「山蔭の家」（二二九頁）に移り住む。そのかん、「男からの電話」は、「もう数えるのが怖しいほどと絶えてい」る（二二四頁）。半年が経ち、比叡への寵山を翌日にひかえたとき、留守中、＜男＞が京都の家を訪ねてくる。あいにくお手伝いの少女も外出しているため、家には鍵がかかっている。＜男＞は家の外で俊瑛の帰りを待つ。だが帰ってきた俊瑛も、鍵を持っていくことを忘れていた。それで俊瑛は、「どこか、お茶でものみに行きましょうか」（二二六頁）と誘う。＜男＞は「いいよ、ただちょっと見に来ただけだから、夕方の汽車で帰る」（二二六頁）とことわる。俊瑛は「不意を打たれたかのように思わず男の横顔を見」る（二二七頁）。彼女は、＜男＞が「夕方」に「帰る」と返事したことに驚いている。＜男＞は俊瑛の家に泊らないどころか、一緒に長い時間をすごそうともしない。＜男＞はここでも、出家した彼女にたいする配慮を示している。「帰った方が安心だろう」（二二七頁）と＜男＞は言い添える。俊瑛以上に、＜男＞のほうが出家の前の二人の関係にもどるまいと心に決めていることが窺知できる。＜男＞の、俊瑛にたいする思いやり、愛が読みとれる。

こうして、二人は家の外で、立ち話をする。俊瑛がエアドアのことを話したあと、＜男＞は得度式の日の夜、幸江の別荘で、俊瑛が離れの部屋にやってきたことを話題にし、「あの時、ほんとはびっくりしたんだ」（二三〇頁）と告白する。なぜなら＜男＞は「誤解した」からである。＜男＞は、「ひとつだけ、誤解したことがある。あやまるよ」（二三〇頁）と伝えている。おそらく＜男＞は、俊瑛が得度以前の関係をもちつづけることを望んでいると思い込んだのであろう。俊瑛は、「ただ、行ったのよ」（二三〇頁）とか、「あなたが可哀そうでたまらなかったの、お詫びがいいたかったの。ただ行けばわかってくれると思って」（二三〇―二三一頁）とか説明している。俊瑛の言葉に嘘いつわりはない。しかしすでに分析したように、「可哀そう」に思う気持ち、「憐憫」は、愛の欲望につうじる感情であり、俊瑛が人間的な愛のぬくもりをもとめて、＜男＞のもとにやってきたこともたしかである。＜男＞は俊瑛の話に調子を合わせ、「そうだ、あんたはただ、来たんだ。そういう人だ」（二三〇頁）とか、「わかったよ、すぐ」（二三一頁）とか応じている。けれども＜男＞は俊瑛の心の奥底に潜むものを――肉体的なものではないにせよ、愛への渇望があることを、直観的に見抜いていたように思われる。俊瑛の霊的成長には、＜男＞の愛が深くかかわっている。俊子の出家得度によって、二人の関係は新たな次元の愛の関係に入ったのである。次の文章はこのような文脈のなかで把握することができる。

「情熱の炎は、燃えるにまかせたら、必ず衰え死灰の日を見るだろう。炎のまま、ある日突然凍結させてしまえば、透明で華やかな盛りの色と輝きを、永久に繋ぎとめることが出来る。熱さえ氷に明け渡す覚悟がつけば」（二三一頁）。

ここでは、情熱の炎が有する「透明で華やかな盛りの色と輝きを、

永久に繋ぎとめる」ための方法、言いかえれば、情熱の炎の美しさを持続させるための方法が考察されている。その方法とは、炎を「燃えるにまかせ」るのではなく、「ある日突然凍結させ」ることであり、「熱」を「氷」に「明け渡す」ことである。二人の関係の場合、俊子の出家得度が、情熱の炎を「突然凍結させ」ることに、「熱」を「氷」に「明け渡す」ことに該当する。俊子の出家得度によって、二人の肉体関係は終わるとはいえ、二人が新たな愛の関係に入ることは、この引用文からも了解される。

俊瑛は比叡に入山し、六十日の修行を体験する。そのかん、〈男〉は「デリーで買いつけ」（二三二頁）をするため、印度に旅する。かくして二ヵ月のあいだ、二人は別れ別れになる。この期間中、俊瑛の内面で、〈男〉への思い（愛）がどのようになるのかを概観することにしよう。

叡山に入って一ヵ月が経過した頃、俊瑛は、「情熱が衰えないと思っているのか」（二六四頁）と難詰した〈男〉の言葉を想起しつつ、印度にいる〈男〉のことに思いをはせる。けれども、「山に入って以来、下界の消息は全く絶えてしまった」（二六四頁）と確認しているごとく、俊瑛は「下界」とは無縁のところにいる。俊瑛には、〈男〉が「今頃印度のどこを歩いているのか想像もつかない」（二六四頁）。そして「新聞もテレビも見ずラジオも聞かない暮しの中で一ヶ月もすごすと下界にいた自分が影ででもあったような昏い感じがしてくる」（二六四頁）。このような感じ方は、「下界にいた自分」を、今の自己とは違う、縁遠い存在のように認識することである。したがって、〈男〉のことも、顧慮の外に置かれる。この点において、〈男〉が言ったように、俊瑛のなかで、情熱は「衰え」ている。というより、修行に専念する彼女の内心においては、〈男〉へのうわついた情熱など微塵もないと判ずるのが適切である。

とはいえ、俊瑛は〈男〉のことを完全に忘却するわけではない。彼女が止観をするために、夜、楢の大樹の下の石の上に坐りに行くことはすでに述べた。その際、俊瑛は〈男〉とともに、何年か前、叡山に来たこと、そして叡山から堅田の町へ降り、浮御堂に行き、それから魚清楼という料亭で鴨料理を食べたことをありありと思い出している。〈男〉は鐘を撞くのが好きな人である。「鐘楼さえ見ればそれを撞きたがる幼児性を残してい」る（二六六頁）。俊瑛は、比叡の大講堂の前の鐘楼の鐘を、〈男〉が撞いたこと、〈男〉だけが撞いたので、〈男〉が「撞けばよかったのに」（二六七頁）と口にしたことを、記憶に甦らせている。このように、俊瑛は、〈男〉との思い出にひたることもあるのである。

比叡での寵山においては、密教の行が終わりに近づくと、結願の護摩供に入る。護摩の火は、「業より生じた罪障や一切の煩悩を焼き亡ぼす聖なる火」（三〇〇―三〇一頁）である。俊瑛は同室の妙恵から、「結願の護摩の中に、願いごと書いて燃やすと、適うんですよ」（三〇二頁）と教えられる。俊瑛は結願に行者が当る。行者とはこの場合、護摩壇の上に立って祈る人を指す。俊瑛は壇上に立

つ。俊瑛には、「今更、未来にかける願い事は何もな」い（三〇二頁）。地上的なことがらの中で、期待あるいは希望するものは何もない。「最初の炎」が「音をたてながら天上に向けて吹きあげた時、かつて覚えたことのない深い戦慄が軀の奥を貫いて走」る（三〇二頁）。なぜ俊瑛は「深い戦慄」を覚えるのか。護摩の火が、「罪障」や「煩悩」を「焼き亡ぼす聖なる火」、つまり恐しい火であるからだ。

俊瑛は護摩の火の燃える「ごうごうという音」に触発されて、東京のマンションの「窓を打つもがり笛のような風の音」を聞いたと思い、「炎の中に、すぎ去った有縁の男たちの俤」を見る（三〇三頁）。次に得度式の日の、出家間際の「鶯色の色留袖の自分の有髪の姿」を思い起こし、さらには、「ばらばらに突き崩されたような頼りなげな男の顔」、すなわち得度式を終え、幸江の別荘に着いて対面したときの〈男〉の顔を思い浮かべる（三〇三頁）。そして今までに関係をもった男たちの俤、得度前の自分の姿、得度式の日の〈男〉の顔は、あたかも「火にくべられた」写真が「くるりと生きもののように火の中で舞いながら焼け消えるように」、炎の中で次々と「かき消えてい」く（三〇三頁）。

この場面はどのように解釈すべきなのだろうか。まず、得度直前の自分が護摩の火のなかでかき消えるというのは、どういうことなのか。出家得度する以前の自分が全面的に焼かれ、葬り去られるということを示すのだろうか。そうではあるまい。焼き尽くされるのは、俊子時代の〈罪障〉とか〈煩悩〉なのであって、これらが燃えることによって、俊瑛の存在は浄化されるのだと考えられる。俊子が関係した男たち、とくに得度の日の〈男〉の顔が炎の中で消えるのも、このような脈絡のなかで理解すべきである。なるほど護摩の火のなかで、俊子が交わった男たちが燃え尽きるということは、俊瑛が男たちと訣別するということであり、この点で、男たちが葬り去られることを意味するかもしれない。けれども葬り去られるのは男たちの肉体的部分であって、とりわけ今もかかわりを持っている〈男〉については、〈男〉を護摩の火で燃やすことによって、俊瑛は〈男〉への愛を浄化したいのであろう。護摩の火は全体的に見て、存在を焼き尽くすことで葬り去る火というより、煩悩を焼き亡ぼすことによって存在を浄化する火と解すべきである。

護摩壇の上に立った俊瑛は、お祈りをとなえる。彼女は「炎の中に自分が吸いこまれていく」（三〇三頁）のを体感し、「薄い紙になった自分」（三〇三―三〇四頁）が「焼ける」（三〇四頁）のを見る。「とかしこまれた肉体の空になった目だけの自分の、何と軽やかなことか」（三〇四頁）との感慨に、俊瑛はひたる。目以外の自分が焼き尽くされて、「軽やか」になった自分を感じるとは、護摩の火によって存在が浄化されるということである。護摩の火が葬り去る火ではなく、浄化する火であることは、ここからも察知できる。

籠山のさいごの日、院生たちは南条真潤の誘導で三塔巡拝をおこなう。朝八時に横川を出発し、午後二時すぎに根本中堂にたどり着き、それから大講堂の前の鐘楼のところに来る。真潤は一同の者に

鐘を撞かせる。俊瑛の番は阿佐井覚心のあとである。覚心が鐘を撞こうとしているとき、俊瑛は、「自分の全身から血の気が一気に引くような目まいを覚え」る（三〇九頁）。というのも、「人垣の背後、大講堂の石段の上に立って、こちらを見つめている目があ」るのを直覚し、「男が来ている」と思ったからである（三〇九頁）。彼女の「目まい」は、印度にいるはずの〈男〉が「来ている」と思えたときの驚きに起因する。また俊瑛が〈男〉の幻を見るのは、彼女がそれだけ〈男〉のことを意識しているからである。俊瑛は、「鮮やかな若草色のワンピースを着た都会風の化粧の若い女がよりそって立って、やはりこちらに目をそそいでいる」（三〇九頁）ような幻覚にとらえられる。〈男〉が「若い女」を連れて、こちらを見ているような錯覚に見舞われる。それはなぜか。まず想定されるのは、嫉妬の感情がこうした幻影を見させたという点である。しかし六十日間の籠山を経て、自らの信仰を堅固にした俊瑛が、嫉妬といったような人間的な感情に襲われることはあり得ない。籠山の体験によって、彼女は地上的・肉体的なことがらからは解脱しているはずである。それに二人の肉体的な関係は、俊子の出離によって終止符を打った。二人が肉体の次元を越えた関係に入った以上、〈男〉に新しい女ができても不思議はない。俊瑛が〈男〉にたいして、浄化した愛を有するがゆえに、〈男〉が「若い女」を同伴していると錯覚したのである。

阿佐井覚心のあと、俊瑛に鐘を撞く番がまわってくる。撞木の綱をもったとき、俊瑛は「撞けばよかったのに」という「男の遠い声」を「耳によみがえ」らせる（三〇九頁）。前述のように、かつて二人で叡山に来た折、〈男〉は大講堂の前の鐘楼の鐘を撞いたことがあった。俊子が鐘を撞かなかったので、〈男〉は「撞けばよかったのに」（二六七頁）と言ったのである。また俊瑛は、撞木が「今にも胴に触れそうになった時」、「もう一度全身の力をこめて引きしぼっ」ている（三一〇頁）。かつて〈男〉が「二度そう繰り返した」ことを「思いだし」たからである（三一〇頁）。このように、俊瑛は〈男〉のことに思いをはせながら、鐘を撞いている。[5] 六十日の籠山が終わりを迎えた時点においても、〈男〉への愛は消滅しない。籠山によって、俊瑛は霊的に成長し、彼女の宗教（信仰）は揺るぎがたいものとなった。とはいえ、〈男〉への愛は全面的に放棄されるのではなく、浄化されたものとして生きつづけられる。繰り返して言うように、俊瑛の場合、南条真潤の場合とはちがって、宗教（信仰）と愛とは敵対しない。愛は浄化されるがゆえに、宗教（信仰）と両立する。というより、俊瑛において、愛は宗教を強化するはたらきをしているとさえいえよう。

五　おわりに

小説『比叡』を三つの角度から読解した。まず女主人公藤木俊子における人間的な愛（男たち）への執着、ならびにそれと訣別する

事情を問題にした。次に、藤木俊子が出家得度することによって俊瑛となり、自らの信仰（宗教）を確立していく過程を明らかにした。それから信仰と愛とのかかわりを考察した。南条真潤の場合を一瞥し、俊瑛における肉体への意識を取り上げたあと、俊瑛と＜男＞との関係をしらべた。俊子の出離ののち、＜男＞が欲望を断とうとするために、俊瑛もまた、＜男＞への愛を浄化していくために、信仰と愛とが敵対するのではなく、両立・共存することを論じた。

それにしても、ヒロイン藤木俊瑛が浄化した愛をいだきつつ自らの宗教を確立していくという事実、換言すれば、＜男＞との肉体的関係を絶つものの、＜男＞との愛の絆をも完全に断ち切って信仰の道を歩むのではないという事実には、『比叡』の顕著な特徴を示すものとして注意を払うべきである。この事実は、作品執筆時点での作者の信仰のかたちを暗示してもいるだろう。仏教の信仰を獲得するに至った瀬戸内晴美においては、他者＝愛が存在するのだ。瀬戸内晴美は他者＝愛を共存させながら、信仰を生きる態度を有している。この態度は、たとえば高橋たか子の宗教的姿勢と比較すると際立つ。周知のように、高橋たか子は一九七五（昭和五十）年にカトリックの洗礼をうけ、一九八〇年代には、主としてフランスで敬虔な修道生活を送った。瀬戸内晴美は出家して尼僧となり、高橋たか子は回心して修道女になったという点で、両者のあいだには類似性が見いだされる。だが信仰形態がちがっている。高橋たか子の場合、ひたすら信仰が希求されるがゆえに、彼女の内心には、他者＝愛は見うけられない。高橋たか子は他者＝愛の不在のなかで自らの宗教を追求する[6]。この点において、彼女の宗教と、他者＝愛が存在する瀬戸内晴美の宗教とは鮮やかな対照をなしている。

さいごに、『比叡』においてしばしば形象化されている＜火＞と＜雪＞について論及しておきたい。まず＜火＞の表現を見ることにしよう。第六章で、出家した俊瑛は、京都の杉野老人の持ち家の一つに移り住む。別居中の夫人が住んでいた家で、はじめて案内された折、壁という壁に絵がかかっていて、「その絵のどの一枚も、すべて炎で描いたように真赤」で、「風景も、静物も、花も、人物も」、すべて「赤一色」である（二〇四頁）。俊瑛は「炎の中に置かれたような切迫した気分に息がつまりそうにな」る（二〇四頁）。杉野老人は、「うちの奴が描きよったんですねん」と知らせ、「何でこんな火事みたような絵ばっかり描きよるんか、気がしれまへんわ」と愚痴をこぼす（二〇四頁）。夫人の絵だとわかった俊瑛は、「火事」のような絵のなかに、「七十歳を越えても、女道楽の絶えたことのないという杉野の、名だけの妻の位置を五十年近くも守り通してきた夫人」の「怨念の炎」を見てとる（二〇四―二〇五頁）。絵の中の、炎を連想させる赤は、「怨念」という情念、もしくは嫉妬の情熱を表象している。ここでの＜火＞は、杉野夫人の満たされない欲望と関係している。

しかしながら、この作品において、＜火＞が人物の情熱・欲望と照応するのは例外的である。第三章、得度式にのぞむために乗った

東北行きの列車の窓から、俊子が野火に目をやる一節がある。俊子は「火の色の浄らかさ」に「身震い」する（八三頁）。彼女には、「夜の野を焼きつづける炎は、今日かぎり捨て去ろうとする自分の五十年の生の垢を焼きつくしてくれる浄火」（八三頁）であるように見える。すでに考究した、第八章の護摩の火と同様に、この野火は、浄める火としての機能を持っている。

俊子は東北行きの列車のなかで、ドイツ中部を旅行中、タクシーでロマンティッシュ・シュトラーセと呼ばれている旧い街道を走りながら、車窓から野火を目撃したことを追懐している。車を止めてもらった俊子は、「広大壮絶な野の火」（八六頁）を目のあたりにする。「ろくに男に相談もせず、衝動的にいきなり出発してしまった今度のひとり旅の底にくすぼっていたもの」が「燃えつ」きるような気分を味わい、「涙」を「あふれ」させる（八六頁）。彼女は「駈けだしてあの火の中にのまれたいという切ない願望」（八六頁）をいだき、「小さな昆虫のように、炎の中で飛びはねながら、黒焦げになっていく自分の姿」（八六―八七頁）を想像する。ここでの野火は、俊子の存在を焼きつくす火である。だが同時に、迷いの中にいる彼女を浄化する火であることもまた、異論のないところであろう。

護摩の火、野火と同様に、赤富士の火もまた、浄める火とみなしうる。第六章、京都に移り住んだ俊瑛は、赤富士の夢をみる。東京のマンションの十三階にいた頃、窓から暁の富士が見え、その記憶が彼女の脳裡に宿っているからだ。夢の中の富士は、夜が明けるとともに、黒富士から赤富士に変わる。ついに、「富士はまるで体内から火を吹きだすようなまぶしい赤に燃え輝いた。金紫に染った雲が赤富士の肩と裾に箔をのべたようにただよった」（二二三頁）といったように、景色はとらえられる。「きれいでしょう」（二二三頁）と彼女が不在の〈男〉に言いかけているごとく、美しい光景である。太陽の光線を浴びた赤富士の火の美しさは、見る者の心を浄めるほどのものである。もっとも、赤富士は第二章、早朝、俊子が〈男〉といっしょにマンションの窓から眺める、回想の場面でも出てきている。そのときの赤富士は、「美しすぎる黎明の放恣な輝きは、なにか淫らなものにつながっていた」（五二頁）と描かれていて、浄化する火の印象を与えない。しかし俊子が俊瑛となり、霊的に成長するにつれて、赤富士の火は、美しさだけが記憶に残り、その美しさによって見る人の存在を浄化するものに変容するのである。

事情は、夕陽についても変わらない。出離を間近にした俊子が、〈男〉の故郷へ〈男〉とさいごの旅に出かけることは先に述べた。この旅で、二人は夕暮れどき、海辺に立つ。二人は「落陽の朱に染ま」った「ヨット」と、「真赤に染った島影」を観望する（一八〇頁）。空は「夕焼けで燃えたつようになり」、島は「残照の火の中で、焼きあげられている兜のよう」な様相を呈している（一八〇頁）。この海の眺望は、燃える夕陽の火の風景である。この火は、見る者をも焼き、浄める役割を果たしているのではないだろうか。このこと

は、子ども時代の〈男〉が黄昏どき、毎日のように海辺に来て、「夕焼けで火事みたいに真赤に燃え上る」（一八〇頁）空と海を見渡し、「夕暮には真赤に見える」[7]（一八〇頁）島を望見していた点からもうかがい知ることができる。子どもの頃、〈男〉は落日の火によって、存在を焼かれ、あるいは洗われ、浄められたいと無意識のうちに願っていたように思われる。少年時代の〈男〉は真赤な島を望みながら、「あの島に一度渡りたい」（一八〇頁）という思いをつのらせる。島への憧憬は、夕陽の火によって浄められたいという願いと等価なものである。

『比叡』における〈火〉、すなわち杉野夫人の絵の中の火、野火、赤富士の火、落陽の火を分析した。杉野夫人の絵の中の火は夫人の内なる怨念（情熱）を表徴するけれども、それ以外の火は存在を浄化するはたらきをしていることが判明した。これらの火は、作品第八章の護摩の火につながり、収斂することによって、その本質を露呈している。

作品のなかの〈雪〉に目を転じることにしよう。第一章では、得度して二年後の俊瑛の生活がまず伝えられる。京都に住む俊瑛の家の外では、深夜、雪が「霏々と」もしくは「間断なく」降る（八頁）。雪は「純白の布のように目に映」る（八頁）。この「純白」という語は〈純粋さ〉〈汚れのなさ〉を含意する。

雪は第四章・第五章で出てくる。第四章は、得度式を終えた俊瑛が、タクシーで中尊寺から抜け出すところを叙述している。幸江の別荘に到着した際、タクシーの運転手は、「あっ、降って来ましたね」（一五四頁）と知らせ、雪に注意を促している。この雪は、夕食後も降りつづき、〈男〉は窓ぎわで障子をあけて、「ほう、凄い、すっかり積っている」（一六二頁）と叫んでいる。第五章には、俊瑛が毛布をかぶって、離れにいる〈男〉を訪ねる場面がある。このとき、〈男〉は俊瑛の「毛布の肩についた雪を見て」、「雪か」と「ひとりごとのようにつぶやい」ている（一九三―一九四頁）。このように、第四章・第五章では、俊瑛が幸江の別荘に着いてから、夜、〈男〉の部屋に行くまで、雪は降りつづいている。この雪が、俊瑛と〈男〉との関係の記述とのからみで降っていることに留意しておこう。

第六章は、俊瑛が京都に移り住み、寵山のため比叡に出発するまでの時期を扱っている。この章でも、俊瑛が部屋の窓を開けて、眺めるというかたちをとって、雪が出てきている。「雪は十二月から三月まで降りつづいた。終日降ることは珍しかったが、朝には挨拶のように必ず降ってみせた」（二〇〇頁）と語られる。ここでの雪は、得度以後の俊瑛の霊的成長を見まもるかのように降っている。

雪は、寵山を問題にした第七章でも見られる。すでに述べたように、俊瑛は夜、止観のため、榕の大樹の下の石に坐っているとき、〈男〉と叡山に来た帰り、浮御堂に近い、魚清楼という料亭で鴨料理を食べたことを振り返る。そのとき、外は雪で、二人は料亭から、月の光の中の雪を眺める。俊瑛の回想をつうじて、「湖に薄く舞い落ちる雪が月光に染められ、金粉をまいているように湖水の面に

映っていた。湖面も月光に染められ金波がひろがる上に雪が休みなく降りつづけている」（二七四頁）といった描写を読むことができる。このあと、「それは不思議なこの世ならぬ幻想的な光景だった」（二七四頁）との印象が記される。雪の光景の幻想性は、「男とここにこうして旅のつかのまのひとときを、鴨の鍋をつついていることも夢幻の出来事ではないのかと思わ」（二七四頁）せるほどである。ここでは、第四章・第五章の雪と同様に、〈男〉との関係の叙述とのかかわりで、雪が描かれていることに注意を喚起しておきたい。

雪は第八章においても認められる。第八章では、三千仏礼拝の模様を物語った件りが見いだされる。俊瑛はすでに言及したように、この荒行の途中、意識をうしない、「機械的に軀が動いているだけで、自分の足がどこを踏んでいる」かも「わからな」くなる（二九〇頁）。極度の疲労のなかで、「軀が動いていることも忘れ」、「もしかしたら、もはや、軀は動いていないのかもしれな」いと思う（二九一頁）。こうした中で、俊瑛は雪の幻を見る。「牡丹雪が、愕くような速さで地に落ちつづけ」、「いつのまにか」、「自分の肩にも頭にも、それがしんしんと重く降りつも」り、「脚も腰も、もはや雪にすっかり埋められ」る幻影を見る（二九一頁）。彼女は自分を、「雪の中に立ちつくす一本の樹」（二九一頁）のように知覚する。俊瑛はどうして雪で動けなくなる幻影を見るのか。三千仏礼拝の過程で、「軀が動いている」のかどうかわからなくなるほど疲労困憊しているからである。ではなぜ雪なのか。雪が汚れのない純白さを保持するがゆえに、浄化する作用があるからだ。ここの雪は、三千仏礼拝がそうであるように、俊瑛の心身を清浄にする役目をになっているだろう。

『比叡』における、主要な〈雪〉の描写を拾ってきた。作品のなかで、雪はしばしば降っているといえると思う。〈雪〉はいかなる意味を有しているのだろうか。雪は、第四章・第五章と第七章の雪がそうであるように、俊瑛（俊子）と〈男〉との関係の記述とのからみで描かれている。すでに見たように、俊瑛の、〈男〉への愛は浄化されたものとなる。雪の描写はこの事実と照応ないし対応している。なぜなら雪は、汚れを覆い、清浄にするものであるからだ。また第六章、第八章の雪は――ただし第八章の雪は幻であるが――、俊瑛の霊的成長を見まもるかたちで出てきている。第一章の雪もまた、得度から二年後のものであるのだから、霊的成長をなしとげた時点で降っている。霊的に成長するとは、自己の内面を浄化することにほかならない。結局のところ、俊瑛の生の歩みは、〈男〉への愛をふくめて、自己の内面を浄化していく過程である。〈雪〉は浄化するものである。先に検討した〈火〉もまた、この作品において浄化するものであった。〈雪〉は〈火〉とともに、ヒロイン俊瑛の内面の浄化と深く関連している。作品における〈雪〉と〈火〉は、俊瑛が内面を浄化していく過程を象徴的に表現していると論断することができる。

ところで、〈男〉と俊瑛が愛を浄化していくがゆえに、信仰と愛

とが両立することは前述したとおりである。つまり〈男〉との愛が浄化したものとなるかどうかは、俊瑛の内心の問題であると同時に、〈男〉の姿勢ともかかわる。〈男〉が俊瑛にたいする姿勢を変え、欲望を断ち切ろうとしたために、彼女は霊的に成長することができた。俊瑛は〈男〉への愛を浄化していくものの、愛そのものは放棄しない。この事実は、『比叡』執筆時点での、瀬戸内晴美のある種の限界性を示しているかもしれない。こののち、瀬戸内晴美・寂聴が人間的な愛とどうかかわり、愛の問題をどう処理していくのか、別の作品にそくして検証することを、次の課題としたい。

註

（1）目次の四の（1）までの部分は、「『比叡』読解のこころみ（一）」として、山口大学「文学会志」第五十八巻（二〇〇八）に発表。

（2）「広辞苑」第四版（岩波書店、一九九一）を参照。

（3）作品第四章は、すでに引用した、「闇の中に離れにつづく長い廊下が、トンネルのように浮んでくる」という文で終わる。第五章は、〈男〉とのさいごの旅の回想場面からはじまっている。

（4）このとき、二人は雑草のなかで寝そべっている。男が口を開く直前に、「ゆっくり上体を起す俊子を、寝ころんだまま煙草を吸いつけている男が目で制し、顔を招きよせた」（一七九頁）という記述が見いだされる。

（5）作品は、俊瑛の「解き放」った撞木が、「鐘の胴めがけて一気に力強く走り翔んでい」（三一〇頁）くところで終わっている。

（6）高橋たか子における他者＝愛の不在にかんしては、拙稿「『誘惑者』読解のこころみ――『テレーズ・デスケルー』との比較のもとに――」（日本キリスト教文学会九州支部発行「キリスト教文学」第十九号、二〇〇〇）、「高橋たか子の『荒野』を読む（一）（二）（三）」（「キリスト教文学」第22号・第23号・第24号、二〇〇三・二〇〇四・二〇〇五）、「高橋たか子の『装いせよ、わが魂よ』を読む（一）（二）（三）」（「キリスト教文学」第25号・第26号・第27号、二〇〇六・二〇〇七・二〇〇八）を参照。

（7）「島の向こうに陽」が「沈む」ので、「いつでも」その島は「夕暮には真赤に見える」のである（一八〇頁）。